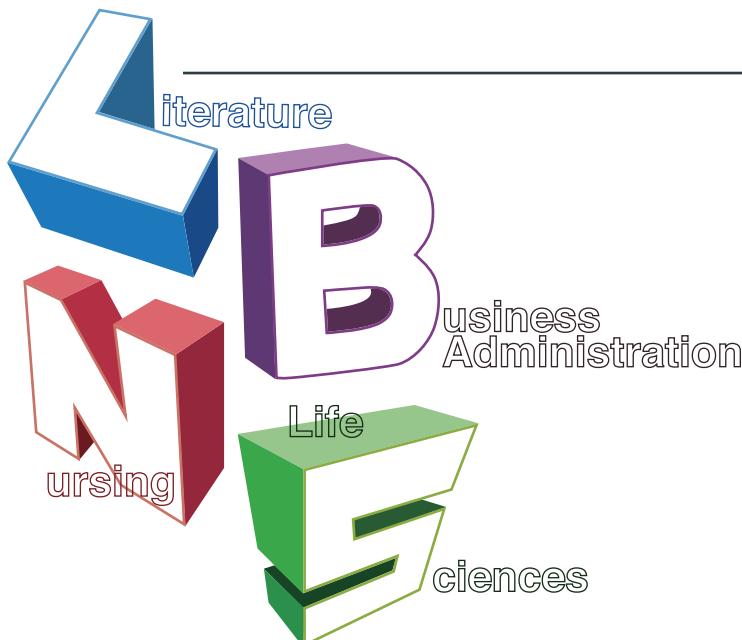


学術研究センター

Newsletter

2018

Vol. 6



目次

1. ニュースライン
2. 学長挨拶
3. 学術研究センター長 所感
4. 大学院研究科報告
7. 研究員活動報告
8. ICコロキアム報告
9. 研究倫理教育講習会
10. 学術研究センター、この1年

ニュースライン



● 2018年度「ICコロキアム」開催報告

最新の研究や教育成果を発表し、本学の多様な専門領域の教員で共有、互いの専門知識を高め合うことを目的に開催しているICコロキアム。本年度は、大貫和恵先生(生活科学部・食物健康科学科)による国際学術成果発表報告、田口尚史先生(経営学部・経営学科)の教育職員研修報告。活発な質疑・応答もあり、無事に終えることができました。

● 研究員活動報告

学術研究センター研究員である平田正吾先生(文学部・児童教育学科)からの研究活動報告「知的障害児・者における運動プランニングについて」を掲載しました。

● 研究倫理教育講習会について

学術研究センターの取り組みである研究倫理教育講習会の報告です。本年度は学外より2名の講師をお迎えし、過去の事例やロールプレイを交えながら、研究倫理の重要性を説明いただきました。



学長
挨拶

地域でキラリと光る大学であり続けるために



学長 東海林宏司

茨城キリスト教学園の定める第14期中期経営計画(2016~20年度)における大学マスタープランの一つである「研究の活性化」の実現に向けて、学術研究センターでは一歩一歩具体的施策を実行しています。課題となっていた旧カウンセリング研究所・子ども未来研究所との関係に関しては、2018年度より両研究所を「カウンセリング子育て支援センター」として統合し独立させることにより、学術研究センターとの棲み分けを明確にすることができます。

学術研究センターと深く関わる委員会としては、研究支援委員会と倫理審査委員会を挙げることができます。研究支援委員会は、外部研究資金の獲得に関することや、学内の研究プロジェクトに関する事項等に関わります。一方、倫理審査委員会は、学外の有識者も加わり、本学教員によって計画される研究が倫理上問題ないかを審査します。両委員会とセンターの連携により、研究者が安心して研究を遂行できる環境を整えています。

昨今、研究倫理に関しては、全ての専任教員に講習会の受講が求められることに加えて、大学院生や学部生に対する研究倫理教育の重要性が強調されるようになっています。特に学部生に対しては、教員や大学院生に対するアプローチとは少し変え、わかりやすい言葉で研究倫理の大切さを伝えていく必要があるでしょう。そのために、センターを中心として、「研究者」だけでなく「教育者」の立場からも教員が知恵を絞っていくことが求められています。

半世紀を超える歴史を有する本学は、地域や国際社会とのつながりを大切にしてきました。学術研究においても、地域社会の様々な課題の解決に寄与する研究や、地域のグローバル化に寄与する研究を推奨とともに、国際学会等での発表に対しても支援の仕組みを整えつつあります。本学がこの地域においてキラリと光る大学であり続けるためには、教育の充実の基盤となる学術研究の活性化を欠かすことはできません。これからも学術研究センターを中心とした研究環境の整備を続けていきたいと思います。

(しょうじ・ひろし：文学部現代英語学科・教授)



2018年度を振り返って 研究活性化への期待と研究倫理教育の必要性

学術研究
センター長
所感

学術研究センター長 梶田泰孝

日頃より学術研究センターの活動にご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。旧名称の教育研究センターが設立されてから7年が経過し、本学における研究活動の中核として、日々、業務を行っております。2018年度は、学術研究センターの所属であった「カウンセリング研究所」および「子ども未来研究所」がセンターから離れ、新たに「カウンセリング子育て支援センター」が発足しました。また学内の職員異動に伴い、新スタッフを迎えるなど、大きな変化のあった年となりました。

最初に2018年度日本学術振興会科学研究費助成事業(以下、科研費)への応募および採択の状況、合わせて学内の研究助成状況を報告します。

【日本学術振興会】

- ・科研費応募および採択状況(2017年11月申請)

応募総数：12件(基盤研究B:1件、C:4件、若手:7件)
 採択数：6件(基盤研究B:1件、C:3件、若手:2件)
 (前年度より継続：7件)
- ・研究活動スタート支援(2018年5月申請)

応募総数：2件
 採択数：1件

【学術研究センター研究推進経費】

- ・プロジェクト研究[自由課題研究(共同)]：採択2件
 (前年度より継続：1件(重点課題研究))
- ・国際学術成果発表助成
 海外学会参加費および参加旅費：採択各1件

【教育職員研修申請(2020年度研修実施予定)】

- ・申請1件：採択1件[長期・国外]

学内研究助成には、重点課題研究をはじめとする研究助成、論文校閲費や掲載費など、各種制度が整備されています。センターとしては、学内における周知をさらに進め、より多くの先生方に活用頂ければと思います。希望される方は、是非お問合せください。

2018年度は、学外より講師の方をお招きして計3回の研究倫理・生命倫理に関する講習会を開催いたしました。簡単な実施報告を9ページに記しました。是非、参考いただければと思います。既にご存知の方が多いと思いますが、大学は機関内研究者に対して研究倫理教育の機会を設け、研究者は受講することが求められています。受講が出来ない場合は、学術振興会などがWeb上で公開しているe-ラーニングによる受講も可としています。そして、これらの実施状況(開催回数や講習会への参加状況など)は、毎年文部科学省に対して報告を行っています。

ここ数年、研究倫理教育の受講等に対する国からの指導が強くなっていると感じます。もちろん、研究者として研究倫理は欠かすことのできないものですが、背景には、研究費の不正使用や特定研究不正(改竄、捏造、盗作)の事案が起きていくことにあると推測されます。機会がありましたら、文部科学省のWebサイトをご覧ください。研究倫理教育の講習会は、次年度も開催します。ご自身で研究倫理教育は必要ないと判断されずに、講習会等を受講されますようお願いいたします。

合わせて、近年は大学院生および学部学生に対する研究倫理教育が求められています。次年度、センターでは簡単なパンフレットを作成し、大学院生および学部学生への配付を予定しています。他の方の文章を引用もなく使用し、自分の文章として扱ったり、得られた結果を都合よく修正したりする等の行為は許されません。大学院生の修士論文や学生が作成するレポート等もその対象です。先生方には授業等で配付をお願いすることがあると思いますが、ご協力をお願いいたします。

学術研究センターの業務をこなしていると、先生方の研究内容を伺い知ることができます。教育にお忙しいなか、研究に取り組む先生方には頭が下がる思いです。学内には興味深い分野をお持ちの先生が多く、さらなる研究の発展を願っています。学術研究センターとして、これから学内研究の発展のためには、学部・学科や専門を超えた先生方の研究交流を進めることが重要ではないかと考えています。各先生方の研究を、多くの方が知る機会を提供することで、異分野の研究が融合し、新しい研究が生まれる。研究歴が浅い方も巻き込み、研究がつながっていく。そのようなサイクルが生まれることを期待して、今後の研究活動支援を続けていければと考えます。

最後になりますが、学術研究センターは、いまだ対応できていない事項が数多くあります。専任職員2名で対応しているため、科研費や個人研究費の管理業務に追われ、新たな研究支援に踏み込めない苦立ちも感じます。ご不便をおかけすることもありますが、今後も宜しくお願いいたします。

(かじた・やすたか：生活科学部食物健康科学科・教授)



大学院研究科報告

文学研究科

文学研究科長 上野尚美

本学大学院文学研究科には2つの専攻(英語英米文学専攻と教育学専攻)があり、それぞれ3つまたは4つの分野(英米文学・英語学・英語教育と教育学・臨床教育・教育心理学・特別支援教育)と関連科目群から編成されています。

各専攻の研究活動について、下記にご紹介します。

英語英米文学専攻

英語英米文学専攻では、2018年8月26日(日)、27日(月)の2日間、サン德拉・マッケイ博士(サンフランシスコ州立大学名誉教授)による第2回大学院Special Lecture Seriesの特別講義8時間を実施した。「国際語としての英語という観点からの教材作成」に関して、①グローバル化と言語教育、②国際語として英語を教える原理と実践、③国際語としての英語の枠組みにおける文化の扱い、④ライティング教材の作成方法、⑤リーディング教材の作成方法、⑥語彙教材の作成方法、⑦スピーキング教材の作成方法、⑧文法教材の作成方法の8つのトピックで、教材作成の演習を含む実践的な授業であった。講義はすべて英語で行われ、受講生も英語で演習等に参加し、質問や意見交換などが活発に行われた。グローバル化が進み、英語使用者数が母語使用者数の数倍になっている現在、教材開発には自国の文化を反映させる視点が必要であることが強調された。



本専攻では、2018年度は飯村貴洋、信原史織、渡辺玲子の3名が修了した。飯村は、英語教育の分野で教材開発を課題研究に替える初めての事例として、統合型技能を高める教材研究を行った。信原は、「英語の依頼表現の学習に関する研究—タスクの実践と効果—」を、渡辺は“A Study of Politeness”を修士論文として提出した。

本専攻の教員については、英語教育の分野では、上野はハワイ大学英語教員研修プログラム(茨城県教育委員会と協働)の実施と研究紀要への投稿、村上は小学6年生から中学2年生までの日本人英語学習者の英語の語順習得についての研究発表・研究紀要への投稿、国際教育学会での発表を行った。英語学専門の三上は英語発音・表記学会第23回大会において「制約に基づいた音韻論」を口頭発表した。応用言語学専門の東海林はコーパス言語学の手法を用いて、英語の語彙やコロケーションの分析、語用論や談話分析に取り組んだ。言語の転置を研究する三輪は、「素性の上方

志向の継承と残余」とする研究発表を行った。イギリス文学専門の唐戸は、研究および論文発表に加え、『ロビンソン・クルーソー』の翻訳を出版した。社会言語学を専門とするジャブコは、論文「『日本語・ウクライナ語社会言語学辞典』の編集方法」を発表した。

(英語英米文学専攻運営委員 村上 美保子)

教育学専攻

教育学専攻では2018年度、池内耕作・安喰勇平(教育学)、江尻桂子・黒澤泰(教育心理学)、櫻井由美子・藤原善美(臨床教育)、平田正吾・斎藤遼太郎(特別支援教育)が授業や研究指導に携わった。

教員による最近の研究成果としては、教育学の分野では、池内が教職課程に導入されるコアカリキュラムをふまえ、「教育方法論」の動向に関するレビューを本学教職課程論集(2017)に発表した。また、安喰が他者論の観点から教育の倫理について考察した論文を教育学研究ジャーナル(2017)に発表した。教育心理学の分野では、江尻が障害児を育てる母親の社会経済状況に関する調査研究をInternational Journal of Developmental Disabilities(2017)に発表、黒澤が日本語版カップル用多側面ストレス尺度の妥当化に関する研究をJournal of Relationships Research(2018)に発表した。臨床教育の分野では、櫻井ががん患者のセルフヘルプ・グループに関する論文を本学紀要(2017)に発表、藤原が関係性支援への応用を目指した関係性動機づけ理論についての論文を進路指導(2018)に発表した。特別支援教育の分野では、平田が発達性協調運動障害に関するアセスメントの信頼性や妥当性についてFrontiers in Psychology(2018)に発表、斎藤が知的障害児に対する「教師の指導観」に関する論文をSNEジャーナル(2017)に発表した。大学院生に関しては、木名瀬公実子(指導:江尻)が「家族のケアを担う子どもの生活の実態とケア役割に対する認識」というテーマのもと研究を進めている。木名瀬は現在、茨城県内の公立小学校に教諭として勤務しており、現場での実践経験が研究に生かされることが期待される。

また、年度末にはFD検討会が実施され、心理職の養成に関する教育課程について、活発な意見交換が行われた。

とくに、修士論文やケース報告に関する指導のあり方や課題について情報共有や議論が行われた。



(教育学専攻運営委員 江尻桂子)
(うえの・なおみ:文学部現代英語学科・教授)

生活科学研究科食物健康科学専攻

生活科学研究科長 飯 島 健 志

【はじめに】

本学大学院生活科学研究科食物健康科学専攻は、「食物科学」分野と、「人間栄養学」分野の2つの専門領域を設けております。「食物科学」分野では、食物が持つ機能成分および危害因子など、人間の健康やQOL(Quality of Life)に与える因子について研究し、一方、「人間栄養学」分野では、食物摂取後の栄養素の機能発現、食物と健康や疾病との関係を研究しています。近年、食べ物がもつ栄養性、嗜好性および機能性について科学的根拠が重要視されるようになり、当研究科においてもこれら領域の未解明の研究にチャレンジして新たな知見や科学的根拠を導き出し、広くヒトの健康増進に寄与することを目指しております。以下、当研究科の研究内容について紹介します。

【研究テーマ】

当研究科では、スポーツと栄養との関係、食べ物と生活習慣病との関連、食品の機能性に関する研究など、多岐にわたっています。以下に当研究科の主な研究テーマを紹介します。

- ・スポーツ時の代謝応答と運動能力の関係性(中村研究室)
- ・生活習慣病予防と健康増進に関する研究(桐井研究室)
- ・生体マグネシウム不足時の栄養代謝変動の解明(梶田研究室)
- ・ヒト褐色脂肪の機能等に関する研究(会田研究室)
- ・時空間の情報処理様式と運動制御に関わるヒト大脳生理学的研究(鯨井研究室)
- ・ヒトの栄養代謝・抗酸化代謝に関する研究(坂倉研究室)
- ・慢性腎臓病患者の栄養指導効果に関する研究(石川研究室)
- ・細菌のコロニー形成、納豆菌の特性と分離・実用化(熊田研究室)
- ・食品の嗜好性と機能性に関する研究(大貫研究室)
- ・食品中のビタミンCに関する研究(飯島研究室)

【研究成果】

2018年度の大学院生ならびに教員の主な学会発表は以下の通りです。

(大学院生の学会発表)

- ・栄養教諭・学校栄養職員の職種と採用方法の違いが業務内容に与える影響. 中村良美, 中村和照. 第65回日本栄養改善学会. 2018年9月

(教員の学会発表)

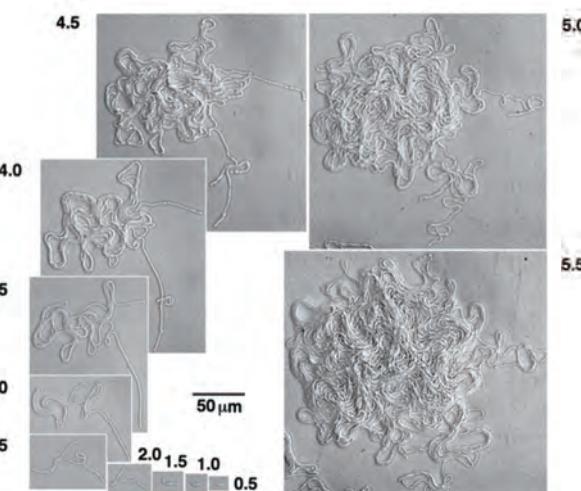
- ・トレイルランニングレース参加者の脱水率について. 中村和照. 第26回日本運動生理学会大会. 2018年7月
- ・2日間連続の自転車レース時の血糖変動について. 中村和照. 第65回日本栄養改善学会. 2018年9月
- ・トレイルランニングレース参加者のトレーニング状況について. 中村和照, 半田佑之介. 第31回ランニング学会大会. 2019年3月
- ・無毒フグ(養殖)からの肝油抽出法の検討. 大貫和恵, 山

部真祐子, 五百蔵良, 野口玉雄. 日本調理学会総会.

2018年8月

- ・多職種連携による糖尿病透析予防指導の取り組み. 石川祐一. 日本腎臓学会. 2018年6月
- ・5年経過後における糖尿病透析予防指導管理の現状. 鈴木薫子, 名和礼子, 中山真由美, 石川祐一, 植田敦志. 日本透析医学会学術集会. 2018年6月

ここで、今年度本学に赴任された熊田教授の研究室を紹介します。熊田研究室では、食品に関連する微生物の研究をテーマとしていますが、その中で納豆菌についての研究があり、自然界から納豆菌を分離し、納豆製造に利用することを目指しています。納豆菌は、枯草菌(*Bacillus subtilis*)に分類されますが、食べて美味しく感じられる菌株は、そのうちの一部に過ぎません。また、それらの株を使って製造した納豆は、色、香り、味および硬さなどの特性に違いがあることから、それらの菌株を使い多様な特性の納豆を作ることも研究目的です。実際、今までに複数の納豆メーカーが、私たちが分離した納豆菌を用いて納豆製造を行なっています。今後とも納豆菌の分離と納豆製造、および納豆菌の特性の研究を行なってゆく予定です。



1個の納豆菌細胞の増殖過程(数値は培養開始からの経過時間(h))

【おわりに】

生活科学研究科食物健康科学専攻は、これまで11名が修了、修士号(食物健康科学)を取得し、一般企業、公務員および学校教諭など各方面で活躍しております。食べ物は、私たち人間にとて必須のものであり、「医食同源」という言葉があるように、日頃からバランスの取れた美味しい食事をとることは、病気を予防し、さらには治療に役立つと考えられています。しかし、これらの科学的根拠となるメカニズム等は未だ不明な点が多く、一層の科学的研究が求められています。当研究科の研究によって、その一端が明らかとなり、人々の健康維持や疾病予防につながる一助となれましたら幸いです。

(いいじま・たけし：生活科学部食物健康科学科・教授)

看護学研究科看護学専攻

看護学研究科長 片 田 裕 子

【はじめに】

看護学研究科看護学専攻は、2011年に開設され既に16名の方が修士の学位を取得され教育に実践の場にと活躍されております。高度看護実践能力と研究教育能力の修得を目指し教育課程を編成しております。医療の高度化、多様化する医療職へのニーズ、高齢化など様々な社会の課題に対しての研究詰問に対して深考し、精深な学識と実践力を修得された高度な専門職として活躍するために人材を育成しております。

研究分野では看護基礎科学分野と実践看護学分野に論文コースを配置しております。また実践看護学分野内に慢性疾患看護の専門看護師(以下、CNS : Certified Nurse Specialist)コースがあります。両分野の研究活動は、主体的な学生と、専門家として日々研鑽を積み教育研究活動に邁進する教授陣が優れた研究能力、高度な専門職性を養い、看護に関する諸能力をもって地域社会と国際社会に貢献することを目的としております。以下に実践看護学分野の精神看護学領域における研究活動、CNS(慢性疾患看護)の実践活動について述べます。

【活動報告】

(1)精神看護学領域

実践看護学分野精神看護学領域における研究活動の一つとして、「救命センターで働く看護師の感情労働とストレス」の実態を調査し、救命センターの看護師のメンタルヘルスの支援を目的に研究活動を行っています。2013年度からこれまで6年にわたり、日本精保健看護学会、日本看護科学学会、日本集中治療医学会で研究成果を発表してきました。また、2017年6月には、スペインのバルセロナで開催されたICN 4年毎大会(2017)に参加し、

「Current work and future challenges for nurses in medical institutions responsible for emergency care」というテーマで発表を行い、国際的な知見を深める機会ともなりました。



ICN, 2017, Barcelona, Spain

現在は、日本学術振興会科学研究費助成を受けて「救急部看護師の精神的ケアの実態と実施可能性の検討」をテーマに研究を進めています。今後も国内外へ向けた研究の発信をしていきたいと考えています。

(2)CNS(慢性疾患看護)の実践活動

私は2016年に慢性疾患看護専門看護師の資格を取得し3年が経ちました。資格を取得してから困難事例に携わったり、事例研究を行ったり、院内外の講師を行ったりと様々な活動をしてきました。

私は以前から地域を見据えた看護に携わりたいという思いが強く、2018年12月より地域包括ケア病棟に配属となり、患者さんが安全で安心した社会生活が送れるように支援していくことになりました。慢性疾患の患者さんは徐々に進行する病状や終わりのみえない治療、再発の恐れなど身体的にも精神的にもストレスを抱えて生活することになります。そのため私は、地域で生活する患者さんが病気とうまく付き合いながらよりよい生活が送れることを常に心がけています。

また、患者さんだけでなく家族やそこで生活する地域に目を向け、その人がその人らしい地域で生活できるよう支援する看護を実践していくことを思っています。そして、患者さんと医療スタッフが同じ目標に向かって手をとりあい、支えながら生活できる住みやすい街づくりを目指していくことを思っています。



国家公務員共済組合連合会水府病院
慢性疾患看護専門看護師
石原未幸氏(2013年度修了)

【終わりに】

2018年度、6名の新入生を迎える社会における看護の高度な専門職性、研究能力への期待と即時性を感じております。様々な分野から様々な背景をもって学修に取り組む大学院生へ教授陣は、多様化するニーズに応えるべく、教育と研究により精進する努力をしてまいる所存でございます。今後は、科学的根拠を捉え、個別性のある看護をより質の高い専門性のある能力と結びつける場であり、大学院生と教授陣の相互作用がより活発な研究活動や実践活動となり、社会に発信できる看護学研究科となりたいと願っております。

(かただ・ゆうこ：看護学研究科・教授)

研究員活動報告

知的障害児・者における運動プランニングについて

文学部・講師 平田正吾

運動プランニングとは、道具使用や対象物操作などの際に運動の最終的な目標に合わせて、運動があらかじめ計画されることであるが、近年これと関連する現象であるEnd-state comfort effect(ESC、最終状態の安楽効果)が注目を集めている。これは運動を遂行する際には、次の運動へと移行しやすい状態で終了することを基準として、運動があらかじめ計画されるという現象を指す。例えば、開口部が下に伏せられているコップに水を注ぐ際には、親指を上に向けて持つ方がコップを掴みやすいにも関わらず、私達は親指を下にしてコップを掴むことが多い。これはコップを掴んだ後に水を注ぐ際に、そちらの方が安定した状態(親指を上にした状態)でコップを持つことになるからであり、こうしたことをESCの現れと解釈する。ESCは、運動の効率性を担保するために運動があらかじめ計画されていることの反映であることから、適切な運動プランニングの現れの一つとされている。

筆者はここ数年、共同研究者や自らのゼミの指導学生と共に、よく知られた発達障害の一つである知的障害がある者達(以下、知的障害者)におけるESCの実態について検討を重ねてきた。知的障害は、知的発達の問題を主要な特徴とするものであるが、その運動制御に関しても問題が認められることが、臨床的にもよく指摘されている。菊池・平田・奥住(2018)は、知的障害者におけるESCの実態について、Cup manipulation taskを用いて検討した。Cup manipulation taskは、開口部が伏せられた容器の底に付けられた物を取るよう求められた際に、対象者が容器をどのように扱うのか観察することから、ESC出現の有無を評価するものであり、これまでに多くの研究で使用されている(図1)。知的障害者52名に対する測定の結果、知的障害者におけるESCの出現は稀な事柄であることが明らかとなった。これに留まらず菊池ら(2018)では、ESCが出現しなかった知的障害者における反応を分析したところ、非安楽反応が最も多く現れることが明らかとなった。非安楽反応とは、運動をはじめに快適な姿勢で遂行することにより、快適でない姿勢で運動を終えることとなる反応である。知的障害者において、ESCの代わりに非安楽反応が優勢に出現していたことは、彼らの運動プランニングの未熟さを示しているように思われる。現在、知的障害者におけるこうした非安楽反応の出現を規定する要因を探索中である。また、知的障害者におけるESCの出現と、手指を用いた作業能力(手指の巧緻性)の関連を検討したところ、ESCが出現する

者ほど作業能力も高い傾向にあることが明らかとなった。この結果は、2018年度にイタリアのパドヴァ大学で開催された関連する国際会議で発表した(Hirata, Komatsuzaki, & Okuzumi, 2018)。

こうした知的障害者に対する測定だけでなく、幅広い年齢の定型発達児に対しても測定を行うことにより、ESCという観点からの運動プランニングの発達変化についての検討を現在行っている。また、知的障害と同じくよく知られた発達障害である自閉症スペクトラム障害の者達に対しても、現在測定を計画中である。これらの一連の検討を行うことから、運動プランニングの発達とその障害の実態を明らかにしたいと考えている。

関連する研究業績 :

- 1) 菊池優貴乃・平田正吾・奥住秀之.(2018). 知的障害者における運動プランニングの特徴について～End-state comfort effectに注目して～. 日本特殊教育学会第56回大会, ポスター発表, 大阪.
- 2) Hirata S, Komatsuzaki R, & Okuzumi H. (2018). Motor planning and manual dexterity in adults with intellectual disabilities. 12th European Conference on psychological theory and research on Intellectual and Developmental Disabilities, Padova.

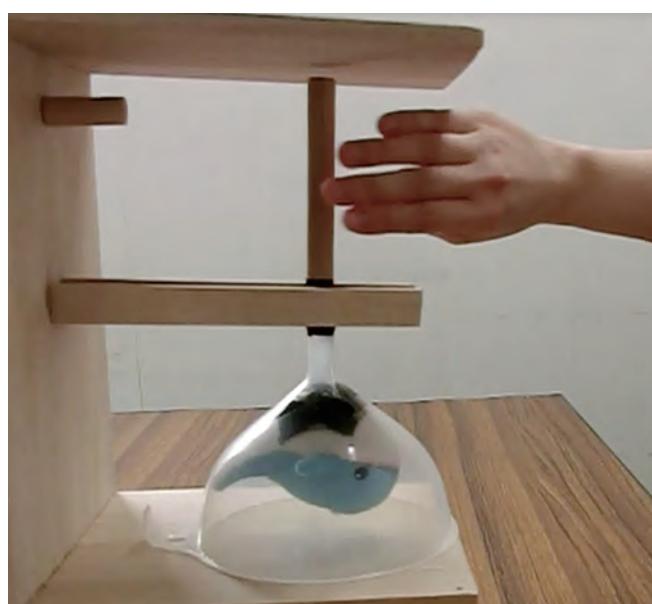


図1 Cup manipulation task(写真のように手をはじめに回転させ、親指を下にして容器を取った場合、ESCの現れと解釈する)

(ひらた・しょうご：文学部 児童教育学科・講師)

コロキアム報告

2018年度 ICコロキアム 活動報告

学術研究センター主催の講演会「ICコロキアム」は、本学教員が最新の研究や教育の成果を発表し、専門領域が異なる教員間で共有することにより、互いの専門的知識が高まることを目的とし開催しています。本年度は、研究活動の更なる国際化を目指し、教育職員研修[長期・国外]および国際学術成果発表助成[海外学会参加費・参加旅費]の報告・研究紹介を行いました。

講演題目：

教育職員研修の成果とインプリケーション

経営学部経営学科 田口 尚史



教育職員研修は、他の研究者との共同研究を促進させたり、海外の先進的な研究に触ることのできる良い機会である。そこで今回は、自身の教育職員研修を振り返り、将来、研修を検討している方々へのインプリケーションを提示したい。私は、2017年度の教育職員研修制度(長期・国外)を利用して、1年間、北欧フィンランドのタンペレ工科大学とトゥルク大学にVisiting Professorとして滞在した。2014年、当時のトゥルク大学のLeena Aarikka-Stenroos准教授がJournal of Service Management誌に投稿した私の草稿を読み、興味を持ったことから、共同研究を申し出てくれた。

学内手続きを経て、前年度の夏休みから出国の準備に着手した。フィンランド大使館への在留許可申請の他、留守にする自宅の管理(警備会社との契約)、銀行での手続き(貸金庫契約や定期預金解約)、携帯電話契約(電話番号保管とSIMロック・フリー携帯電話の新規購入)、引越荷物の荷造りと発送(引越業者との契約)など、当初は想像もしなかった作業がたくさんあることに気づいた。

現地では、ほぼ毎日、自宅と研究室の往復だった。タンペレでは地元タンペレ大学のMika Yrjölä先生との間で消費者行動に関する調査について何度も議論し、共同で論文を執筆した。トゥルクでは、教員、研究者、大学院生などが参加して定期的に開催されるインフォーマルなリサーチ・セミナーのメンバーに加えて頂き、研究発表も行なった。帰国後、研修中の研究内容を「カスタマー・エンゲージメント概念の台頭と研究潮流」というタイトルの論文にまとめることができた。また、研修の副産物として、多くの研究者とのネットワークを構築することができた。

将来、研修を予定している方々へのインプリケーションとして、研修先は研究機関(大学)で選ぶのではなく、研究領域や研究テーマの整合性を重視して選んだ方がより良い人脈形成が期待できるということだ。研修中(1年間)の人間関係よりも帰国後の人脈の方が大きな財産となる。

講演題目：

未利用資源“無毒フグ(養殖)の肝臓”的有効利用
～フグ食文化のないヨーロッパ諸国での発表～

生活科学部食物健康科学科 大貫 和恵

2016年9月7日～10日にスペイン(グラナダ)で開催された第17回国際栄養士会議に参加した。今回、遠距離であったためか、前回のシドニー開催よりも日本人の参加者が少なかったように感じた。オープニングセレモニーでは、フラメンコを鑑賞することができ、あまりの迫力ある踊りに魅せられ、会場の四方八方から拍手であふれていた。ポスター発表では、A0サイズ程の電子パネルに自分が見たい演題の要旨番号を入力してポスターが掲示されるため、発表者とのディスカッションを活発的に行うことができず、残念であったが、口頭発表では、英語だけでなく、スペイン語も飛び交っており、大変新鮮なディスカッションであった。

今回の演題は、「The nutrient composition of non-toxic pufferfish liver oil(無毒フグの肝油の栄養成分)」で、ポスター形式にて発表した。フグの肝臓(フグ肝)は、食中毒原因物質TTX(神経毒)を保有しているため、有毒種、無毒種にかかわらず廃棄されている。本研究で使用するフグ肝は、養殖方法が確立され、100%安全性(無毒)が確保されたもので、その特性は、嗜好性が高く、IPA、DHA等が含まれていることから機能性効果(記憶学習能力等)が認められている。このフグ肝に様々な付加価値(安全性、機能性等)を付けて復活させるため、サプリメントとしての利用を視野に入れた肝油を抽出し、その特性を検討した。得られた肝油の脂肪酸組成は、不飽和脂肪酸が飽和脂肪酸より多く、多価不飽和脂肪酸が約40%を占めていた。特に、機能性効果がある高度不飽和脂肪酸(DHA、IPA)は、非常に多く含まれていた。また、食用油脂の劣化の指標となる酸価および過酸化物価は、低値を示し、サプリメントとして、効果的に利用することができると推測される。今後は、肝油の機能性成分の生理学的効果を検討していきたいと考えている。

最後に、今回の機会を与えて下さった大学、支援して下さった方々に心から感謝の意を表します。



研究倫理教育講習会

学術研究センターでは、人間や自然、社会現象の究明に対し、グローバルな視点から複眼的・総合的に深く掘り下げ、解決の道が提示できるよう、研究活動と支援に取り組んでいます。また、「研究活動の不正行為への対応ガイドライン」(平成18年科学技術・学術審議会)の趣旨・内容を踏まえ、本学に本務を有して研究活動に従事している者および本学の施設や設備を利用して研究に携わる者を対象に定期的に研究者等に求められる倫理規範の修得等をさせるための教育(研究倫理教育)を実施するとともに、本学における研究活動における不正行為防止について取り組んでおります。ここでは2018年度に実施した講習会について報告します。

第1回 研究倫理に係る講習会

日 時：4月4日(水) 19:00～20:00

講 師：銭 谷 秋 生 氏(ノースアジア大学・特任教授)

参加者：48名(大学院生12名を含む)

講師としてお招きした銭谷先生は、本学の心理福祉学科(旧：人間福祉学科)の教授として所属しておられましたが、2009年より秋田大学教育推進総合センター教授に就任され、現在はノースアジア大学の特任教授としてご活躍されています。また、本学の倫理審査委員(2018–2019年度)もお引き受け頂いております。先生のご専門は、哲学・倫理学です。

講演では、研究倫理を考える教材として「優生学と断種法の歴史」「優生保護法」を挙げ、その歴史的背景や現在に至る経緯についてお話しいただき、『学問研究は、人間を解放するポテンシャルをもつが、同時に人間を不幸にしたり、新しい「意に反する」状態を作り出したりするポテンシャルをも持つ。このことを考えて、研究の目標や目的を定めていく責任が研究者にはある』と述べられました。また研



究者の心得として、日々情報を収集することに努め、正しい研究手法で真理を探求すること、そして真理を語る誠実さを持たなくてはいけないことを強く述べされました。

遅い時間からの開催にもかかわらず、大学院生を含め多くの方々の参加に感謝申し上げます。

第2回 研究倫理教育講習会

日 時：9月12日(水) 13:00～14:30

講 師：上 岡 洋 晴 氏

(東京農業大学大学院農学研究科
環境共生学専攻・教授)

参加者：49名

講師としてお招きした上岡先生は、これまでに数多くの大学や企業において研究倫理教育講習会の講師をご担当されています。また「コピペしないレポートから始まる研究倫理 その一線、越えたらアウトです！」(ライフサイエンス出版)の著者でもあります。講習会では、「なぜ研究倫理を学ぶのか？」を丁寧に説いていただき、さらには「研究不正の実施に至る二つの都合」について、企業で起きた不正の実例や不正が生まれた理由、そして事象後の多大な損失・不利益等について、丁寧にお話し頂きました。

研究機関における研究不正を防止するためには、研究実施の際に必ず記録を取り、振り返りながら研究を進めること、この行動は不正防止のためではなく研究者自身を守ることになることを強く提言されていました。その他、利益相反に係るお話しや、学部生に対する研究倫理教育の重要性についてもお話し頂きました。特に学部生に対する研究



倫理教育については、上岡先生が実際に行っている授業指導を、ロールプレイを交えてお話し頂き、学生に考えさせること、学生の行動変容を促すことの重要性をお話されました。次世代を担う学生の基礎教育となる研究倫理教育の大切さを強く感じました。終了後の質問も多くあり、的確なアドバイスを頂きました。講習会に対するアンケートからも、非常に実りのある講習会であったと思います。

(梶田 泰孝 かじた・やすたか)

学術研究センター、この一年

2018年

4月4日(水) 19:00~20:00

第1回 研究倫理に係る講習会

講 師：銭谷 秋生 氏

(ノースアジア大学・特任教授)

内 容：「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に基づく研究倫理教育

9月12日(水) 10:30~11:50

科研費獲得セミナー

講 師：岩間 信之 氏(文学部・教授)

内 容：「中・長期的な視野に立った研究計画の立案」

「研究計画調書作成のコツ」他

9月12日(水) 13:00~14:30

第2回 研究倫理教育講習会

講 師：上岡 洋晴 氏

(東京農業大学大学院農学研究科)

環境共生学専攻・教授)

11月3日(土)

学園祭での研究成果発表



ポスター展示

2019年

1月15日(火) 14:45~15:30

第3回 研究倫理教育・生命倫理教育講習会

講 師：銭谷 秋生 氏

(ノースアジア大学・特任教授)



研究倫理教育・生命倫理教育講習会

2月22日(金) 10:30~12:00

ICコロキアム 学内研究会

発表1 「教育職員研修の成果とインプリケーション」

田口 尚史 氏

(経営学部経営学科・准教授)

発表2 「未利用資源“無毒フグ(養殖)の肝臓”の有効利用～フグ食文化のないヨーロッパ諸国での発表～」

大貫 和恵 氏

(生活科学部食物健康科学科・講師)

編集後記

これまで学術研究センターの所属であった2つの研究所(カウンセリング研究所と子ども未来研究所)を統合し、新たに「カウンセリング子育て支援センター」が設立されました。よって掲載内容も少し変更となり、ページ構成も変更となりましたが、大学院の各研究科やICコロキアム開催報告といった学内研究活動の報告と研究倫理教育講習会の報告を掲載しています。さらに、これまで本学において活発な研究活動を行い、センター研究員としてもご協力を頂いた文学部児童教育学科講師、平田正吾先生の研究員活動報告を掲載しています。

2018年は職員の異動があり、新体制のセンターとなりました。新たな刺激を受けながら、“これまで”を糧に、“このさき”を見据えて、残り1年間のセンター長の任期を務めようと思います。

文末になりますが、本号の発行にあたりご寄稿、ご協力を頂いた皆様、そしてセンターのスタッフにお礼を申し上げます。

(梶田)

学術研究センターNewsletter Vol.6 2018

発 行 者 茨城キリスト教大学 学術研究センター

発行責任者 梶田 泰孝

発 行 日 2019年3月25日

印 刷 日立高速印刷株式会社